

第1章 紀州のあけぼのと古代人



空海と高野山



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代 昭和(戦後)・平成時代

空海の一生

日本で最も有名な僧の一人である空海(弘法大師)は、774(宝亀5)年に讃岐国(香川県)の豪族の子どもとして生まれ、若いころに都に行き、中国の古い書物などについて勉強しました。やがて僧になり、いろいろな場所で修行を積みま^しす。804(延暦23)年には遣唐使の一行に加えられ、中国、唐の都の長安に行き、恵果という唐の僧から、新しい仏教の教えを学び、たくさんの経典をもって日本に帰りました。

空海は、嵯峨天皇の助けを受けて真言宗を開きました。816(弘仁7)年には高野山の土地に、京都の東寺と同じように真言宗の中心となる金剛峯寺をつくることを認められました。空海は832(天長9)年高野山に移り住み、835(承和2)年に亡くなりますが、そのときにはまだ金剛峯寺の建物全部は完成していませんでした。空海の弟子たちの努力によって、9世紀の終わりごろまでによく完成したようです。亡くなってから約90年のちに、醍醐天皇から名前をもらい、それから後、弘法大師とよばれるようになりました。

空海は、仏教の教えにくわしいだけでなく、詩をつくったり字を書くことが上手で、中国語を話すこともできました。「弘法にも筆のあやまり」(弘法大師のような書道の名人でも、書きまちがいをすることがあるという意味)ということわざもあります。空海の教えは、のちの日本の仏教に大きな影響をあたえ、また平安時代の中ごろから、人々は空海に対する信仰をもつようになりました。弘法大師についての井戸や温泉にまつわる伝説などが、全国各地に残されています。なかでも、唐から日本に向かって飛ばした三鈷(仏教の道具)の落ちた場所を、空海が探しているときに、白い犬と黒い犬をつれて、獵師の姿をした、高野明神という神に高野山を案内してもらい、高野山を守る女神の丹生明神から土地をゆずってもらったという伝説は有名です。

高野山の発展と根来寺

高野山金剛峯寺は、10世紀の前半になると東寺の支配を受けるようになり、また994(正暦5)



弘法大師・丹生高野両明神画像(部分)(鎌倉時代 高野山金剛峰寺蔵)

*1 奈良時代・平安時代初期に唐(中国)に派遣した使節のこと。
*2 京都市にある真言宗寺院・教王護国寺のこと。



根本大塔（高野山）

年には雷^{かみなり}による火事でほとんどのお堂が焼けてしまいました。しかし、11世紀に入ると朝廷で大きな権力をもっていた藤原道長^{ふじわらのみちなが}と頼通^{よりみち}の助けを受け、ふたたび栄えるようになりました。天皇や貴族^{きぞく}たちも、たびたび高野山に登るようになります。また高野山のふもとには、官省符^{かんしやうふ}荘^{しやう}^{*1}という荘園がもうけられ、金剛峯寺をささえる領地^{りやうち}になりました。

12世紀になると、高野山の中では覚鑊^{かくぼん}という僧が力をもつようになりました。覚鑊は肥前国^{ひぜん}（佐賀県）の出身で、鳥羽上皇^{とばじやうこう}の助けを受けて真言宗を改革しようとした^{かいかく}しましたが、高野山の中ではこれに反対する僧も多く、はげしい争いがお

こりました。覚鑊のグループは、この争いに敗れて高野山から出て行かなければならなくなり、1140（保延6）年には根来^{ねごろ}（岩出市）に古くからあった寺をもとにして根来寺をつくりました。金剛峯寺と根来寺との争いは、覚鑊がなくなってからも続き、鎌倉時代になると覚鑊の教えを受けついだグループは、ついに高野山から独立して新義真言宗^{しんぎしんごんしやう}という新しい教えを開くことになりました。



わかやまの知識



【高野町石】

高野山のふもとの慈尊院^{じそんいん}から奥の院^{おくいん}まで続く約24kmの高野参りの道に、鎌倉時代後期に建てられた石碑^{せきひ}があり、高野町石^{こうやちやういし}とよばれています。もとは木製の卒塔婆^{そとば}（仏塔）が道しるべとして建てられていましたが、1265（文永2）年に高野山の覚敷^{かくまう}という僧侶^{そうりよ}の呼びかけで、1266年から1285（弘安8）年のほぼ20年間に町石が建てられました。1町^{ちやう}（約109m）



高野町石

ごとに町石、36町ごとに里石^{りせき}（1里=約4km）が建てられ、その総数は221基にのぼりました。のちの時代に建てかえられたものを除いて、現在、当時の町石が179基残っています。

町石は、高さ約3m、幅30cmの角柱^{かくちゆう}の花崗岩^{かこうがん}を五輪塔^{ごりんとう}の形に加工し、細長い部分に町数^{きしん}と寄進した人の名前を刻んでいます。石は、摂津の御影^{せつづのみかげ}（神戸市）から船で運ばれたと考えられています。寄進した人として、後嵯峨天皇^{ごさ が}をはじめ朝廷^{ちやうてい}や貴族^{きぞく}、鎌倉幕府^{かまくら}の北条時宗^{ほうしやうときむね}や有力な武士などがいました。また、僧や貴族の女性のほか、庶民^{しよみん}と考えられる人たちの寄進による町石が6基あります。高野の僧の働きかけで信仰^{しんこう}した人々がいたことが考えられます。

* 1 太政官と民部省が符とよばれる命令書で特権を認めた荘園のこと。